同志社大学神学部「基督教研究会」 公開講演会

キリシタン研究の現在
―キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察―

2022 年 11 月 25 日

三輪 地塩

1. はじめに

三輪地塩と申します。専門は日本キリスト教史で、キリシタン史とプロテスタント史、特に幕末明治期～昭和初期にかけてのキリスト教史を主に研究しています。学位論文は幕末明治期のキリシタン殉教の記憶論をテーマに叙述研究を行いました。現在もキリシタン史とプロテスタント史の両面に興味関心を持って研究しています。

今回、公開講演会の任を仰せつかり、キリシタン史の変遷についてお話しさせて頂こうと思いました。「キリシタン研究の現在」と銘打ったのですが、むしろ副題にした、「キリシタンのイメージ形成とキリシタン・ブームの経緯について」、特に幕末明治期から大正・昭和初期にかけての変遷についてのお話になると思います。興味関心を持って頂ければ幸いに存じます。

2. キリシタン史の時代区分と研究の方向

「キリシタン」とか「キリシタン史」という言い方されますが、これには様々なアプローチの方法があります。それはキリシタンという存在をどの時代にどのような切り口で理解するかによって生じる相違ということになります。

まず、キリシタンを時代区分致しますと、「キリシタンの世紀」[1]と呼ばれる 16 世紀のキリシタン全盛期があります。これはポルトガルやスペインなどとの国際文化交流史的研究になります。日本キリスト教史の最初期に関する研究のみならず、極東の日本が欧州と繋がった時代に日本にもたらされた文化や、それにまつわる法制的研究や日本語研究（日葡辞書などの研究）にも広がっていきます。その後、キリシタンは潜伏の時代を迎えますが、この時代の研究が「潜伏（隠れ）キリシタン研究」です。ここから西欧的、すなわちカトリック信仰の視点からの研究や、日本史研究や民俗学的研究としてのキリシタン研究など、様々な分野に分かれます。更に、全国の各藩史など地方キリシタンに焦点を当てたローカルなものや、キリシタン美術研究、考古学的研究、踏み絵やロザリオ、メダイなど「モノ」に焦点を当てた聖遺物研究など、様々な切り口があります。

また「潜伏」という語の使用法も色々ありまして、カタカナの「カクレ」、漢字の「隠れ」、平仮名の「かくれ」などが各研究者や時代によって用いられ方が変わってきます。近年ではこれを「潜伏」として統一される傾向になっているように感じます[2]。潜伏していたキリシタンが正式にカトリック信徒になる場合と、そのまま潜伏時代の信仰を守り続ける場合があり、後者の方を「かくれ（或いは「カクレ」）キリシタンと呼ぶのが最近の一般的な考えです。

このような一連のキリシタン研究ですが、この講演では、そもそも日本においてキリシタンという存在がどのような経緯で世に知られ、学問領域として広がっていったのかについて、その大枠を掴むことを目的としたいと思います。いわばキリシタンについてのメタ研究のようなものとご理解頂ければ良いと思います。具体的には、日本において、現在私たちが知るキリシタン・イメージがどのような経緯で形成され、世に広まったのか。そのキリシタン像の記憶形成の変遷に

影響を与えた諸現象について考えたいと思うのです。

私たち日本人は、日本国内で行われてきたキリシタン迫害の出来事や、潜伏キリシタン信仰が守られてきたことが、日本人にとって自明の事柄であり、一般的に良く知られた知識・経験であったと考えがちです。けれども、実は当時の庶民はキリシタンの出来事について殆ど知識がなかったというのが実情でした。勿論、織豊期から連綿と続く彼らの信仰活動を良く知っている九州北部地方、とりわけ長崎（島原半島、平戸・生月、外海地方）、五島、佐賀、熊本、大分などでは、キリシタンは比較的身近な存在だったかもしれません。1637～38 年に原城を籠城拠点として激しく戦った（かつて「島原の乱」と呼ばれていた）島原・天草一揆についてさえ、幕末期には、潜伏キリシタンたちさえも「忌まわしい出来事」として語り伝えていたようで[3]、現在のようなキリシタンに対する歴史認識は乏しかったと考えられています。

そもそも江戸中期以降は表向き「キリシタンは存在しない」はずでしたし、そのために毎年全国民に踏み絵を踏ませ、「宗門人別改帳」のような住民登録台帳に記載してきたわけです。つまり、江戸幕府に対しては「切支丹はいたら困る」ので、それこそ見つかったら幕府からこっぴどく叱られる、或いは改易されて地位を奪われてしまうかもしれないという事情がありましたから、「あなたの領地に切支丹はいますか？」の質問に対して「おりません」というのが表向き正しい答えになっていたのです。更に言いますと、切支丹禁制の高札には、懸賞金がかけられていました。その額は、高い場合現在の価値換算ですと外車一台が買えてしまうほどの高額賞金だったそうです。このように周囲が目を光らせている中で、表立って自らの信仰を標榜できない時代ですから、まさに文字通りの「潜伏状態」にあったと言えます。

幕末明治期になりまして、西欧列強国からの圧力に屈する形で開国されまして、その後岩倉遣欧使節団からの要請を受け、「キリシタン禁制の高札」が撤去されたのは 1873 年のことでした。岩倉使節団はイタリアのヴェネツィアを訪問した際、この地で天正遣欧使節団や慶長遣欧使節団が残した書簡を見せられ、これらが岩倉具視らの知識に全くなかったものであったと言います。つまり岩倉一行はキリシタンを「知らなかった」のでした。存在は知っていたかもしれませんが、「何者なのか」「どのような逸話があるのか」について、知識がなかったのでした。このことについて、折田洋晴は、次のように述べています。

> 幕末に編纂された『通航一覧』にも遣欧使節についての記載はない。1876 年には、仙台での博覧会で支倉常長の遺品が展示されたのを機に、岩倉は太政翻訳局の平井希昌（1839－1896）に遣欧使節について調査させ、ケンペル[4]やパジェスの著作を使って『欧南遣使考』が刊行された[5]。

岩倉具視は帰国後、欧州で聞いた日本のキリシタンについて調査を開始します。洋書を取り寄せて『欧南遣使考』を刊行したのが日本でキリシタン知識が開かれた始まりであると折田は述べています。1876 年は切支丹禁制の高札が撤去されてから 3 年が経過していましたので、この頃からキリシタンは日の目を見ることが出来るようになったかと言うとそうではなく、キリシタンやキリスト教への差別は激しく残っていました。このような中で、「キリシタン」という存在が、人口に膾炙するのはいつ頃であり、如何なる経緯であったのでしょうか。この点は、従来のキリシタン研究ではあまり関心が持たれて来なかった視点と言えます。

3.「長崎博覧会」と「東京帝室博物館の特別展」

平戸・生月地方のキリシタンを研究している中園成生は[6]、その著作『かくれキリシタンの起源』[7]の第五章で、「イメージとしてのかくれキリシタン」を考察しております。そこでは、禁教時代のキリシタン・イメージについて、「慶長十九（1614）年に全国に禁教令が出された後は、キリシタン信仰は外部者に秘匿される事となり、信者以外の者が正確にキリシタン信仰のイメージを形作るための情報を得る事は不可能となる」と述べておりまして[8]、正しいキリシタン像が高札撤去後まで開示されなかったことを指摘します。

以前筆者は、津和野藩（現在の島根県津和野町）に流配されたキリシタンを研究対象として取り上げましたが、この当地の民衆はキリシタンを見る機会がなかったため、実際の迫害と殉教について殆ど知らなかったと考えられます。またこの流配時期（1867～73 年）に少年だった文筆家・医師の森鴎外は、幼少年期に自分の住んでいた津和野の町にキリシタンが流配され幽閉されていたことについて生涯語らなかったことなども、その裏付けになるかと思います[9]。

このように「キリシタン」や「かくれキリシタン」の存在は、当初一般市民に知られなかった状態から、幕末明治期以降、信者以外の人々により、「実体と離れたイメージで認識され」[10]、現在のようなキリシタン・イメージに定着したと考えられます。

熊本大学の安高啓明は、この時代のキリシタン・イメージの形成について、1906（明治 39）年 5 月、東京帝室博物館で行われた第 5 回目の特別展甲部「嘉永以前西洋輸入品及参考品」によって、日本人にキリシタンの物品が公開されることから始まったと述べています[11]。ここでキリシタン関連遺物は、陳列所が三号館で常設公開され、17 のテーマ構成により、洋書、和書、文書、地図、洋画、銅板、学術器機、耶蘇教遺物、外国武器、楽器、道具、陶器、織物、刺繍、革類、貨幣紀念碑・雑、に分類されて陳列されました。このうち「耶蘇教遺物」の中には、踏絵や浦上三番崩れで捕縛された「吉蔵」が所持していた白磁観音立像などが含まれていたと言います。

この東京帝室博物館の特別展から遡ること 29 年、明治 10 年から 100 日間の会期で開催される予定だった「長崎博覧会」が計画されていました。ここでも「耶蘇絵板」（踏絵）の陳列が予定されていたのですが、教部大輔宍戸璣は、「普通考古之物品」とは異なり、外国との関係に支障をきたす恐れがあるとのことを危惧して、外交上の問題から出品を中止したのでした[12]。岩倉遣欧使節団が帰国してからわずか 4 年足らずのことであったため、外国との摩擦を避ける配慮として行ったのでした。つまりこの時、踏絵を見世物として展示することが外国との軋轢を生むことを当時の政府高官らは知っていたということになります。更に、この時キリシタン迫害あるいは殉教・死に拘わる物品を、人々の興味関心のために陳列することは不敬であること、ひいては、欧米諸国の宗教であるキリスト教を侮辱する可能性があることを、少なくとも教部大輔の役人たちは知っていたことになります。一般の日本人たちがキリシタン遺物を目にするようになるのは、先述した通り、そこから約 30 年の時を経てのことでありました。

この 1906 年の東京帝室博物館の特別展では、板踏絵や真鍮踏絵を模倣して作られ、長崎奉行所で実際に使用されていた踏絵等が展示されました[13]。現在東京国立博物館に所蔵されているキリシタン関係遺品の多くは、1879（明治 12）年に内務省社寺局から引き継いで長崎県に保管されていた信徒からの没収品が殆どを占めています[14]。浦上三番崩れや浦上四番崩れの時に没収された、白磁のマリア観音、ロザリオ、メダイなど、キリシタン遺物の多くが東京国立博物館のキ

リシタン遺品コレクションの大半を占めており、これらは 1879 年には既に同博物館の所蔵品になっていたため、1906 年の東京帝室博物館特別展で「キリシタン」の品物が公の場所で初めて日本人の目に触れることになったのです。このようにして、「キリシタン遺物」が公の目に触れたのは、明治後期のそれも 20 世紀になってからだったことになります。

4. 書籍によって逆輸入されたキリシタン

では、日本国内で「キリシタン」という存在がどのように認識されてきたのかと言いますと、外国からキリシタン書が輸入されたことに始まります。「キリシタンが輸入される」というのはおかしな話ですが、そもそも日本人よりもヨーロッパのカトリック宣教師のキリシタンへの情熱は並々ならぬものがありまして「日本で宣教したい」と強く願う宣教師が多くいたことが知られています[15]。国立国会図書館の折田洋晴の解説に沿うとキリシタン書籍が出版された経緯は以下のようになります。

まず、明治新政府は海外の宗教事情を知るために宗教関連の洋書を翻訳することを急務と考えましたが、それを担ったのが外交官の鮫島尚信[16]でした。彼は、1715 年に J・クラッセが欧州で出版した“*Histoire de l'église du Japon*”をパリで見つけ、日本に持ち帰って太政官本局翻訳係をとおして、『日本西教史』として出版します[17]。更に、レオン・パジェスの『日本二十六聖人殉教記 』（1862 年）[18]と、『日本切支丹宗門史』（1869-70 年）[19]というそれぞれの著作を基に、パリ外国宣教会の宣教師エメ・ヴィリオンや加古義一らによって翻訳・翻案された『日本聖人鮮血遺書』（1887 年）が出版されます。更に、パリ外国宣教会司教のフランシスク・マルナスの『日本キリスト教復活史』（1896 年）[20]など、19 世紀後半になって日本国内においてキリシタン関連書籍、それも邦訳された外国のキリシタン書物が幾つも出版されたのでした。このような外国書籍が幕末明治期に輸入されたことによって、キリシタンについて（特に迫害や殉教にまつわる出来事など）が事細かに国内に知られるようになりました。

その後、カトリック司祭である浦川和三郎は、キリシタン関連書籍『山口公教史』（1908 年）を皮切りに、『日本に於ける公教会の復活』（1915 年）、『切支丹の復活』（1928 年）とキリシタン史の書物を出版いたします。日本人によるキリシタン書、しかも父母が浦上四番崩れの流配者という当事者二世によるキリシタン史の著作です。特に『切支丹の復活』の第 3 章は、「旅の話」として良く知られるようになり、浦上四番崩れで各藩に流配されたキリシタンたちの処遇についての詳細な記録書として現在も重要な資料の一つになっています。浦川和三郎は司祭という立場であることを大いに生かし、地道に進めた信徒たちへの聴き取り調査を基にして、キリシタンに起きた出来事の実態を著わしました。言わば「埋もれていたキリシタンの記憶が掘り起こされた」時代であった言えます。

この頃について、飯島幡司は三田元鍾著『切支丹傳承』の序文で次のように述べます。

> 我國において、趣味としての切支丹研究が流行したのは、今から十數年前、大正の終から昭和の初にかけてであつた。當時は、切支丹文獻といへば、ずゐぶん如何はしいものでも、骨董的價値を呼んで、奪ひ取るやうに賣れて行つたものである。しかし、もともと信仰に根ざした研究ではなく、また時代の要請に促された研究でもなく、單に好事者の間における風潮に過ぎなかつたから、一時は魘されるほどにのぼせあがつても、日の經つままに熱がさめ

て、少数の真摯な研究者を除いては、根のない草のやうに萎んでしまうた。三田君は、この間にあつて、地熱と共に生きのびた潜伏切支丹のやうに、黙黙として研究調査の熱意を抱き暖めて來た少數者の一人である。だから、もとより、浮氣な當て込みの著述ではない。この意味において本書は、新村出博士の近業「日本切支丹文化史」とともに ― 兩書はもとより相違る視野に立つものではあるが ― ほどよく成熟した果物のやうな味をもつてゐる[21]。

飯島幡司（1888－1987 年）は、神戸高等商業学校（現･神戸大学）の教授をする傍ら、朝日新聞に入社し論説委員を経て、朝日放送（朝日放送グループホールディングス）社長、関西経済連合会会長などを歴任する財界の“大物”でもありました。同時に 9 歳で洗礼を受けた生粋のカトリック信徒であり、後にローマ法王庁大聖グレゴリウス勲章を受けています[22]。飯島が「趣味としての切支丹研究が流行したのは、今から十數年前、大正の終から昭和の初にかけてであつた」と述べているように、1910 年頃から 1925 年頃までに掛けてキリシタン研究が流行していたことが示されます。「當時は、切支丹文獻といへば、ずゐぶん如何はしいものでも、骨董的價値を呼んで、奪ひ取るやうに賣れて行つたものである」とあるように、この時のキリシタンへの興味は、新しい研究分野というよりも趣味の段階であり、「信仰に根ざした研究ではなく、また時代の要請に促された研究でもなく、單に好事者の間における風潮に過ぎなかつた」ものと捉えられています。

5. 茨木市千提寺・下音羽の遺物発見とキリシタン・ブーム

時を同じくして、大きな出来事がありました。いわゆる「茨木キリシタン」の発見です。1920（大正 9）年、当時小学校教員であった藤波大超[23]が、東藤次郎氏の所有地からキリシタン墓碑の存在を知りこれを発見したのです。藤波は引き続き、東藤次郎氏に他の遺物を見せて欲しいと何度も懇願するも断られ続けてしまいます。約半年に及ぶ交渉の末、藤波の熱意に折れた東氏が、自宅の屋根裏に括りつけて隠していた「あけずの櫃」の存在を教え、これを開示いたします。1614 年、全国に禁教令が発布され、潜伏を余儀なくされた茨木市千提寺・下音羽地域のキリシタンが、20 世紀初頭まで「かくれ信仰」を守り通していたことに、当時のメディアは色めき立ったと言います。当時かくれキリシタンの信仰を守っていたのは、東藤次郎の母・東イマ、東家の本家である中谷イト、中谷イマの 3 名であり「三姉妹」と呼ばれた最後の「潜伏キリシタン」でした。彼女たちは代々伝えられてきたオラショを唱え、かくれ信仰の祈りを守る生粋のキリシタンであったことも、当時の注目を集めるに十分なことでした。このとき「あけずの櫃」に入っていたのは、「フランシスコ・ザビエルの肖像画」（神戸市立博物館）「マリア十五玄義図」（京都大学総合博物館所蔵）など、極めて美術性の高いキリシタン遺物でありました。

このような 1920 年以降は、にわかにキリシタンへの興味関心が高まる時期であったと言えます。「学術研究の分野」としてではないけれども、当時の日本人たちがキリシタンの存在に「非学術的関心」を抱いたことは確かで、その事について清水紘一は藤谷俊雄の言葉に依拠しつつ次のように述べています。

この間異国情緒に対する文学的関心も高揚し、文壇における北原白秋や芥川竜之介らの活躍もあって、地道なキリシタン研究が「南蛮紅毛趣味」的な風潮に流される状況も生じた。こ

の時期の研究が「宗教的、というよりは宗派的・教団的であり、ついて文化史的であろうとして、ディレッタント的におちいり、世界的であろうとして、国際関係史にとどまった」（藤谷俊雄氏）と評されるゆえんである[24]。

ディレッタントとは、趣味嗜好の愛好家のことであり、つまりは学術的ではないけれども、美術品への関心としてキリシタン遺物に注目が集まったということです。

先に示した飯島幡司の「切支丹文献といへば、ずゐぶん如何はしいものでも、骨董的價値を呼ぶ」という発言は大変興味深いもので、これは恐らく当時このような愛好家たちが増えており、いわゆるキリシタン遺物ブームのようなものが起こっていたことが考えられます。

恐らくこの頃のキリシタン・ブーム期に製作されたと思われる“キリシタン遺物”が、西南学院大学博物館に所蔵されています。その中でも特徴的なのは「紙踏絵」「十字紋様壷」「キリシタン壷・徳利」などで、これらは明らかにキリシタン遺物の偽物でありまして、販売目的の虚構品（模造品）であったことが指摘されています。特に「紙踏絵」についてですが、「踏まれたもの」のように書かれていますが、紙を踏むことが現実的ではないことぐらいすぐ分かります。更に言いますと、黒田家の家紋である藤巴紋、イエズス会の印章、文政元年（1818 年）と敢えて書かれているあたりが余計に怪しく、「切支丹破天連ヲ踏マザル者獄門ノ事」と書いておきながら、1897 年に創業された出版社である「扇城吟社」の章が捺印されていることから、明らかに明治後期以降に作成された「偽キリシタン遺物」であることが分かります。西南学院大学の学芸調査員、中禮尚史氏は「長崎の版画製作業者が、外国人向けの「お土産」として製作したものではないか」と分析しています[25]。

いずれにせよ、明治後期～大正期～昭和初期にかけて、キリシタンは「如何わしい」と言われたり「ディレッタント的」と考えられたり、様々な捉え方をされながら、キリシタン・イメージとして定着していくのでした。

6. 姉崎正治による「キリシタン研究」の登場

このようなキリシタンの趣味的思考が流行する中、これを学際的フェーズへと引き上げたのが、東京帝国大学宗教学講座教授の姉崎正治です。佐藤吉昭は次のように述べます。

> 日本におけるキリシタン研究の伝統は、・・・・・・和辻の特異な解釈論、高瀬の広範な視野と厳密な社会科学の方法論を駆使した新しいキリシタン研究に先立って、日本の近代的宗教学創始者であり、キリシタン史を宗教史学として始めて発展させた姉崎正治（1873－1949 年）によって築かれた[26]。

また、清水紘一も、「キリシタン研究が本格化したのは明治の中頃で、日欧交渉史の視点から村上直次郎氏によって着手された。以来近時の大戦にいたるまで、姉崎正治・太田正雄（木下杢太郎）・高田成友・新村出・比屋根安定・吉田小五郎各氏の業績が注目される」と述べておりまして、村上直次郎と姉崎正治らが中心となって、学問分野としてキリシタン研究が開始されたと述べています。

姉崎正治は、1904 年、東京帝国大学文科大学に「宗教学」を開講し、翌年「宗教学講座」を

新設いたします。彼は『宗教学概論』（1900 年）、『根本仏教』（1910 年）などを著し、日本仏教研究での業績を上げた後、キリシタン研究に着手します[27]。姉崎の最初のキリシタン研究書は『切支丹宗門の迫害と潜伏』（1925 年）で、『切支丹禁制の終末』（1926 年）、『切支丹迫害史中の人物事績』（1930 年）、『切支丹伝道の興廃』（1930 年）、『切支丹宗教文学』（1932 年）と矢継ぎ早に大作を世に出します。これらは「キリシタン五部作
と呼ばれる著作群で、キリシタン史を宗教史学として大きく発展させることになったのです[28]。

7. 文学によるキリシタン・イメージの創出 ―『五足の靴』と芥川龍之介「切支丹物」－

このように、幕末明治維新期から昭和初期にかけて、キリシタンへの関心が高まる中でキリシタン・イメージが形成されました。明らかに「怪しい」と思われる「偽物」であっても、それを購入する人（外国人を含めて）がいたという事実が、この時期をしてキリシタン・ブームと言わしめる潮流が生み出されていた証左となるでしょう。更にここでは、別の視点から、つまり「学問」ではなく「文学」がキリシタン・イメージの形成に一役買ったことについて考えてみたいのです。

1910 年代にキリシタン・イメージを創出した特出すべき出来事は、『五足の靴』という書籍の出版です。この本は 1907（明治 40）年、与謝野鉄幹、平野萬里、北原白秋、吉井勇、木下杢太郎の 5 名が、九州西岸を巡った紀行文・エッセイです。木下杢太郎が旅行に先立って上野の図書館でキリシタン文献を読み漁った後に、彼がこの旅行を牽引したことで、キリシタン遺跡巡りが主な目的になったと言います[29]。この旅行後に北原白秋が出版した詩集『邪宗門』によって、彼は異国情緒豊かな詩を発表し、文壇に南蛮趣味を流行させました[30]。『五足の靴』は、1907（明治 40）年 8 月 7 日から 9 月 10 日までの 29 回『東京二六新聞』に掲載されました[31]。この紀行文が 1 カ月に亘って読まれたことは日本人のキリシタン・イメージに少なからぬ影響を与えたと考えられますし、更に 1909 年頃から「広く明治末期から大正期の文壇に「南蛮趣味」の流行をもたらす原動力となった」[32]のでした。

ちょうどその頃、文豪・芥川龍之介が「切支丹物」と呼ばれる一連のキリシタン小説群を世に送り出しています。これらは 1916 年～23 年に著した作品群のことで、芥川はこの短期間に 15 本ものキリシタン関連の短編小説を発表しています。佐々木啓一は「芥川龍之介のキリスト教観（一）― 切支丹物について ―」[33]の中で、芥川の切支丹物を以下のように分類しています。

Ⓐ初期の作品（切支丹を南蛮趣味、異国趣味、・異端的対象と認められている作品）
「煙草と悪魔」「尾形了斎覚え善」「さまよへる猶太人」
Ⓑ中期の作品（殉教、仏教との対立、切支丹肯定、審美的傾向を帯びていると認められている作品）
「奉教人の死」「るしへる」「邪宗門」「きりしとほろ上人伝」
「じゆりあの・吉助」「南京の基督」
Ⓒ後期の作品（否定的乃至明確に否定していると認められている作品）
「黒衣聖母」「神々の微笑」「報恩記」「おぎん」
「おしの」「糸女覚え書」

興味深いのは、初期（大正 5 年 10 月～大正 6 年 5 月・1916～17 年）、中期（大正 7 年 8 月～大正 9 年 6 月・1918～1920 年）、後期（大正 10 年 12 月～大正 12 年 12 月・1921～1923 年）という、わずか 7 年のうちで作品の性質が、「南蛮趣味」「切支丹肯定」「切支丹否定」へと変化していることにあります。この短い期間に芥川がキリシタンに何を見たのか、その心の変化について今や知る由もないのですが、芥川の作風を一般化して語ることは出来ないにしても、この時期に芥川龍之介という当時のインフルエンサーによって日本国内に多面的なキリシタン・イメージが生み出された可能性を指摘することは出来るだろうと思います[34]。

芥川自身、このような切支丹物を書くに至るには、北原白秋や木下杢太郎の影響があったと自身の作品『西方の人』の冒頭で述べています。「‥‥‥かう云うわたしは北原白秋や木下杢太郎の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。～～」と、キリスト教徒の殉教或いは殉死という出来事に興味を抱いていたと語ります。1927 年、35 歳という若さで自死を選んだ彼に、キリシタン殉教イメージは何らかの作用を果たしたのか否か、想像するより他はないことですが大いに興味が湧いてきます。

では、芥川はどのようにキリシタンについて学んだのでしょうか。佐々木啓一は「切支丹物」に含めていませんが、芥川はキリシタンを題材にした『誘惑』という短編を著しています。この最後の部分に「後記。「さん・せばすちあん」は伝説的色彩を帯びた唯一の日本の天主教徒である。浦川和三郎氏著「日本に於ける公教会の復活」第十八章参照。」[35]と明記されておりまして、芥川のキリシタンについての基礎知識を、浦川和三郎の著作など、当時広く読まれていたであろうキリシタン書籍から得ていたことが分かります。

8. おわりに

これまでキリシタンが日本において如何にして認知され、イメージ定着が行われてきたのかについて述べてきました。幕末明治期には多くの日本人に知られていなかったキリシタンという存在が、外国から輸入された文献と邦訳、外国人宣教師や日本人司祭らの著作、キリシタン文学、そして 1920 年 茨木市での「かくれキリシタン信仰」のセンセーショナルな発見などを通し、1930 年には学際的地位を得て「キリシタン研究」という学問領域が生み出されることになりました。この後、1940 年以降から戦後にかけて、アジア太平洋戦争の「敗戦」によるキリシタン・イメージの変化なども起こってまいります。これもまた興味深いイメージの変遷が起こったようです。更に、1970 年代以降にもキリシタン・ブームが起こり、更に 2000 年以降には、既に知られている「史料」に「分析」や「解釈」を加えて、より学際的な研究に取り組む時代に入ります[36]。上智大学のキリシタン研究者川村信三が述べるように「（キリシタン研究の）新しいステージの研究者は、アナール学派の提唱する「新しい歴史学」や「ミクロ・ストリア」「生活史」などの影響をうけ、前提とすべき多岐にわたる課題を考慮せざるを得なくなった」時代に入ったと言えます[37]。このような中で、世間的には、2018 年の世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の登録によるキリシタン・ブームの再燃が起こっています。この流れを受けて、キリシタンへの関心や研究もまた新しいフェーズを迎えていると言えるでしょう。いわゆる実証主義的歴史研究から、言語論的転回、キリシタン遺物の真偽・虚構を問う研究、更に、キリ

シタン聖地巡礼をダークツーリズムの観点から行う研究など、キリシタン研究の方向は多角的・多方面的に広がって現在に至ります。このような現代的キリシタン研究の傾向や方法などについては、紙幅の関係上、詳しく出来ませんでしたので、ぜひ又の機会に紹介したいと思います。

---

[1] 浅見雅一『概説 キリシタン史』慶応義塾大学出版会、2016 年、2 頁。

[2] 2018 年に世界遺産に UNESCO に制定された世界遺産の名称も「長崎天草潜伏キリシタン関連遺産」であり、「隠れキリシタン関連遺産」ではない。

[3] 高木仙右衛門の手記で高木は「我々は天の四郎とは異なる云々～」と述べており、長崎浦上村におけるキリシタンの精鋭と呼ばれる彼らさえも天草四郎には「幕府への反乱を起こした人物」として記憶されている。

[4] エンゲルベルト・ケンペル（Kämpfer, Engelbert　1651－1716 年）ドイツ人医師・博物学者。ヨーロッパ人として初めて日本についての体系的著書『日本誌』を書いた。ヨーゼフ・クライナー『ケンペルのみた日本』、日本放送出版協会、1996 年、3－ 7 頁。

[5] 折田洋晴「日本関係洋古書の我が国での受容について」『参考書誌研究』（第 68 号）、2008 年、勉誠出版、2-3 頁。

[6] 中園成生（1963 年―　　）

[7] 中園成生『かくれキリシタンの起源―信仰と信者の実相―』弦書房、2018 年。

[8] 中園、同書、407 頁。

[9] 森鴎外の娘･杏奴（随筆家の小堀杏奴）は、あの津和野藩でのキリシタン流配の出来事について、父森鴎外は生涯一切何も語らなかったと述べているが、あくまでも父の思いを推し量って憶測として語ったものであり、鴎外が語らなかったのか、或いは単純にキリシタンを見たことがないため語らなかっただけとも考えられる。

[10] 中園、前掲書、409 頁。

[11] 安高啓明『踏絵を踏んだキリシタン』吉川弘文館、2018 年、238－9 頁。

[12] 安高、同書、236－37 頁。

[13] 安高、同書、240－41 頁。

[14] 『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館、2001 年、16 頁。

[15] 例えば、日本に派遣された MEP 宣教師 Aimé Villion など。

[16] 鮫島尚信（1845－1880 年）、外交官。薩摩藩の留学生として森有礼や五代友厚らとともにロンドン大学に学んだ。

[17] 折田洋晴「日本関係洋古書の我が国での受容について」『参考書誌研究』（第 68 号）、2008 年、勉誠出版、2-3 頁。

[18] 原著は、L. Pagès, *Histoire des vingt-six martyrs japonais*,1862.

[19] 原書は、L. Pagès, *Histoire de la religion chrétienne au Japon,* 1869－70.

[20] 出版年は原著。邦訳は 1986 年出版。原著；Marnas,Francisque., *La "religion de Jésus" (Iaso ja-kyo) ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIX e siècle,* Paris, 1896.

[21] 三田元鍾『切支丹傳承』、厚生閣、1941 年、序文 1 頁。

[22] https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A3%AF%E5%B3%B6%E5%B9%A1%E5%8F%B8（2022 年 11 月 23 日閲覧）

[23] 藤波大超（1894－1993 年）茨木市安元生まれ。実家は浄土真宗大谷派の寺。旧茨木中学時代の恩師天坊幸彦氏から隠れキリシタンの里が千提寺にあるのではないかとの奨めを受けて東藤次郎氏に協力を求めていたが、東氏は頑なに拒否。その後、所有地にある「キリシタン墓碑」の存在を教えたという。

[24] 清水紘一『キリシタン禁制史』、教育社、1981 年、14－15 頁（「　」内は清水による藤谷の言葉の引用）。清水は続けて、「戦後においては、戦前の「南蛮・キリシタン」趣味に対する反省が生まれ、内外史料の一層の発掘を通じて、語学・神学・文学などの各分野で、実証的な研究が進められている」と述べており、アジア太平洋戦争以後になり、キリシタン研究が学問の一分野として確立され出した事を述べている。

[25] https://www.seinan-gu.ac.jp/museum/wp-content/uploads/2017/publish/news33.pdf　（2022 年 11 月 24 日閲覧・西南学院博物館ニュース 33 号、2017 年 12 月）

[26] 佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』、創文社、2004 年、32 頁。

[27] 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988 年、49 頁、「姉崎正治」。この項目の執筆者は海老澤有道である。

[28] 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、同書、49 頁。

[29] 中園成生、前掲書、409－10 頁。

[30] 中園、同書、410 頁。

[31] 五人づれ『五足の靴』岩波文庫、2007 年、122 頁。

[32] 五人づれ、同書、138 頁。

[33] 佐々木啓一「芥川龍之介のキリスト教観（一）―切支丹物について―」『論究日本文学』（9)立命館大学、1958 年、30-38 頁。https://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/ronkyuoa/AN0025722X-009_030.pdf

[34] https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC04DHG0U2A001C2000000/　（2022 年 11 月 24 日閲覧・日本経済新聞オンライン 2022 年 10 月 16 日記事「喫茶店、芥川龍之介がインフルエンサー　社交の場庶民に」）

[35] https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/188_15281.html　（2022 年 11 月 23 日閲覧・底本は『昭和文学全集　第 1 巻』小学館、1987 年）

[36] 川村信三他『キリシタン歴史探求の現在と未来』教文館、23 頁。

[37] 川村信三、同書、23 頁。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP22K12984 の助成を受けたものです。